

氏 名	かめ 喜 まこと 亀 喜 信
-----	-------------------

(論文内容の要旨)

本論文は、自己を伝えるという活動を軸にして、ハンナ・アレントの思想を読み解くことを主題とする。彼女の思想の基本には、人間は行為と言論とによって結びつき、自己を伝え相手を理解することによって、はじめて個として生きることができるという人間観がある。この結びつきが断たれるとき、人間はモノとして処分されてしまう危険にさらされる。政治についての彼女の思想も、この人間観を基本に据えることにより、その独自の性格を明らかにすることができる。

第1章

人が生命維持の活動に専心し、現実の世界に密着している限り、人は種的存在に埋没している。人がある行為をそれ自体で意味があると判断し、実践するとき、その行為のうちにその人の独自の個としての存在が現れる。意味とは、他者に伝えられ理解されることのできる一般的なものである。人間の個としての存在は、この一般的なものとの緊張において、はじめて存立する。行為とは個（自己）と一般（意味）との緊張のうちで現実化するものであり、それゆえに自己は行為のうちに現れ、伝えられる。そして行為は行為者自身には見えないのであり、行為に立ち会いその意味を理解する他者の現前を必要とする。それゆえ自己は、本人よりも他者にこそよく現れる。自己とは、他者と共有された世界すなわち公的領域のうちに、行為として現れるものであって、それ自体で独立して存在するものではないし、所有されるものでもない。従って公的領域から排除されるとき、人は自己を伝える回路を断たれ、個としての存在を奪われる。

行為は予見不可能性と不可逆性というリスクを伴い、人はそのリスクに対応するために約束と赦しの能力を有する。人々は行為という仕方で交わる世界を維持するために、自分の行為を偽らず、それへの責任を担う能力を持つ。また過ちを犯した他者を、悔い改め、新たに始めることのできる人格として、赦す能力を持つ。約束と赦しの能力により、行為による人々の交わりを守ろうとする意志は、自由な存在

としての人間を無条件に肯定する意志に他ならない。

人は他者との「共同の努力」のうちで、世界における現実としての自由を経験できる。それは個人の内面の自由ではなく、世界のうちで他者と共になにかを始める自由である。アレントは、人々が行為と言論という仕方で結びつき、そこから権力を立ち上げるといふ政治のヴィジョンを提示する。平等は、人々が行為によって結びつくための条件である。しかしそれは自明な原理でも論証可能な真理でもなく、あくまで人々の同意に基づく人為（約束）であるとアレントは考える。彼女の政治のヴィジョンは、人々の参加と同意に基づく自治を基盤とする。そこには統治（強制）の契機が適切に位置付けられていないという欠点がある。しかしアレントの主眼は、いかにして全体主義の脅威に対処するかを明らかにすることであり、そのために人々の参加と同意に立脚する共和主義の原理を訴えた。彼女の思想を強制としての統治権力に対する対抗権力の創設に限定して解釈するのは、必ずしも彼女の歴史認識（危機意識）の重みを忠実に受けとめているとは言えない。

第2章

アレントはナショナリズムを「民族による国家の征服」と規定した。それは人々が行為と言論という仕方で結びつくことによってではなく、歴史や文化、言語などの共有に基づく単一性によって政治体を維持しようとする。それに対してアレントは、民族的帰属に基づく集合的アイデンティティを私的領域の事柄として認め、それを市民という法的地位から区別することによって、ナショナリズムに対処しようとした。しかし集合的アイデンティティとは固定された「自然」ではなく、歴史の中で培われてきたものであり、変えることのできるものである。公的領域はむしろ積極的にアイデンティティを問い返すことにより、ナショナリズムの問題に対処するための場となりうるはずである。

アレントは「社会」を、「労働が家族という私的領域を越え出て組織され、しかも公的な重要性を与えられる領域」と規定した。それはメンバーの活動を労働と消費とに一元化し、コンフォーミズムを押し付けることによって、人々の行為と言論による結びつきを脅かす。それゆえアレントは、公的領域と私的領域とを峻別する

ことにより、「社会」に対する政治的生活の独立性を求める。そして生の保障としての「社会的なもの」を「政治的なもの」から除外してしまう。しかし「正義」の概念を導入し、「社会的なもの」を適切な仕方で「政治的なもの」へと変換し、そこに位置付けていかなければ、結局は「社会」による公的領域の浸食を抑えることはできない。また現実の社会は必ずしも人々に一元化を要求するだけではなく、目的追求から自由な交わりそのものを楽しむ社交という次元を孕んでいる。社交だけでなく、地域の自治会などの「市民的繋がりネットワーク」のうちで、人々の協力や信頼が培われるのであり、それは「社会」による平準化の要求を和らげるだけでなく、政治的生活とも地続きである。

アレントは公的領域と私的領域とを峻別したが、公的領域から身体や生命が除外されていること、二つの領域の境界設定が恣意的であることなどがしばしば批判される。公的領域はむしろ、身体や生命に対して行使される暴力や不正について、公正な判断を下すべく議論をすべきであり、また二つの領域の境界設定について、繰り返しその妥当性を問い返す場としても捉えられねばならない。

アレントによれば権威とは、強制力に訴えることなく、過去の重みによって人々を結びつける力である。権威が失われ、議会政治が利害対立によって機能不全に陥り、「大衆」というカオスが出現したとき、ナチスはこのカオスを組織して全体主義運動のうちに回収していった。全体主義のイデオロギーは、人間の個としての存在を否定し、行為と言論による人々の自由な交わりを断つ。このイデオロギーの虚偽を暴露するためには、人々が行為と言論によって結びつき、共有された世界の現実のうちに根を張ることが必要である。そして人間の世界が過去の重みを担うものである限り、全体主義という出来事を記憶し、語り継ぎ、それが何であったのかを理解しようと努めなければならない。

第3章

自己を伝えることは、理解してくれる相手を必要とする相互的なはたらきである。現実の個々の行為や出来事を理解することは、現実と距離を置くことによってその意味を問う思考に基づく。思考によって意味という一般的なものの次元が開け、そ

こから人は自分を個として捉える視点を手に入れる。そして公的領域では、個々の行為や言論の意味を公平に判断することが求められる。判断が公平であるためには、現実の自分の立場から距離を置き、多様な視点を表象し、そのあいだを動き回る「言説的表象の思考」が不可欠である。政治の領域においては、自明で確実な原理は不在であり、厳密な論証を求めることができない。そのような場合に、多様な視点に立つ人々が共有できる公平な判断を下すために、言説的表象の思考が必要となる。

既成の判断の枠組みでは対応できない政治的な危機の時、あらためて現実そのものに立ち戻り、個別の出来事や行為の固有の意味を判断するのが反省的判断力である。それは所与の規則（一般）に個別を包摂するのではなく、個別の事柄から出発してその意味を問い求める思考（反省）を前提する。思考を放棄し、自動機械のように既成の判断の枠組みに従って行動するとき、人は行為による他者との交わりを失い、世界から疎外される。そのとき人は、全体主義に抵抗するための基盤を失う。

現実の固有の意味を理解するためには、出来事の「全体」を外部から眺める注視者（観客）の視点、出来事が一段落してから回顧的に眺める歴史家の視点もまた大切である。それは人々が行為と言論によって交わるなかで、互いを理解するときにはたらく判断力とは、異なる視点に立つものである。しかしこの二つの視点は互いに排斥しあうものではない。人が生きる世界とは、他者との交わりの〈あいだ〉に成り立つとともに、歴史的な世界でもある。人は行為を介して他者と交わりつつ、現在を「過去と未来のあいだの溝」として捉え返し、歴史という大きなコンテクストのなかで自分の「生の物語」を問い直すことによって、新たに何かを始めることができる。

第4章

アレントは、思考の基準を「自己との一致」に置く。思考する人間は、自らの言動が自己自身を欺き偽るものであるかどうか、多様な視点から自分に問い続ける。それは自らの生を、意味と繋がりのある物語として生きるための「自己との対話」である。過去の記憶と思考とによって、人は世界のうちに根を張るのであり、この根は人間の行いに自ずから制限を加えるとアレントは考えた。思考を放棄するとき、

人の行動は外部の要求に機械的に応じるものとなり、自分が本当に何をしているのか分からないまま、根源的な悪でさえも黙々と遂行してしまう。

アレントはまた、「自己との一致」を要求するのは良心であり、それは道德の問題であって政治の問題ではないと述べる。しかし思考が「自己との一致」という基準に背くとき、人は行為と言論という仕方で自己を伝えることはできないのであり、政治的生は成り立たない。その限りで、政治的生は個としての人間の良心（道德）に基づくと言える。しかし人が「自己との一致」を求めるというのは自明なことではない。人は公的領域における交わりのうちで、「自己との一致」を実践した人の言動を現実に見聞きし、あるいはその言動の記憶（物語）に触れ、それによって触発されるという経験を通して、自らも自己への関心を抱くようになるのではないか。自己とは所与のものでも所有されうるものでもなく、行為のうちに現れるものであるとともに、他者の行為を見聞きし、理解することによって触発されるものでもあるだろう。伝えることは伝承でもあり、政治的生は個人の良心（道德）に依存しつつ、政治的生の内こそ良心は培われる。

「自己との一致」とは、自己を無条件に肯定することではなく、様々な視点から自己を問い直す思考の基準である。過去の出来事を受けとめ、その意味を理解しようとすることは、自分自身の在り方を問い直すことでもある。アレントにとって、ナチの全体主義とユダヤ人の絶滅計画という出来事を繰り返し語り、理解することが、自己が世界に根を張る（世界と和解する）ために不可欠なことであった。何事もなかったかのように過去の出来事を忘れ、現在の「社会」の流れに順応して生きることは、世界から疎外され自己を喪失することに他ならない。そのような状態が再び全体主義的統治を招くことを彼女は危惧した。

結論

アレントは全体主義とユダヤ人の絶滅計画という現実直面し、幾つかの問題を探り当てた。それは人が世界から疎外され、思考を放棄し、自己への関心を失っていることである。これらの問題に対処するため、アレントは「自己自身を伝える」活動としての行為と言論を重視し、そこから政治的生を構想した。人々が行為によっ

て結びつくことによって世界が成り立ち、自己への関心が呼び覚まされ、他者と現実を理解するための思考が尊重される。この政治的生のうちで人間の個としての存在と自由とが守られるのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ハンナ・アレントの思想の全体を「自己を伝える」という観点から読み解こうとするものである。近年の世界的なアレント再評価の動きは現在に至るまで継続しており、日本においても多くのすぐれた論考が存在する。しかしながら、いわゆる「熟議民主主義」思想の先駆者とされる彼女に対する評価は、政治学あるいは社会思想史といった文脈で語られることが多かった。これに対して本論は、あくまでアレント自身の専門領域であった哲学、倫理学という視点から再度アレント思想の全体像を明らかにしようとする意欲的な試みである。「自己を伝える」という視点は、いうまでもなくコミュニケーションということに対する着目を意味するが、直接に政治領域におけるコミュニケーションに関する理論を問題にする前に、その基盤にある人間学を解明する必要がある。本論の一貫した姿勢は、このアレントの人間学の徹底的な探究にあるといえよう。

第一章では、まずアレントにおける「行為」の概念に着目し、複数の人間が会う「公的領域」において自己を伝えることを行為の本来の姿であるとするアレントの有名な議論が的確に分析される。ただ、ここでなされた行為の可能性の条件に関する考察は、行為の「予見不可能性」と「不可逆性」という点を重要視することで、従来の政治思想的研究によっては十分に論及されているとは言い難かった、「約束」や「赦し」といった、アレント人間学の理解にとって極めて重要である概念にまで及んでおり、これは本論のひとつの功績である。また、アレントの政治哲学のもつ具体的な実行可能性という点での難点を、現状への異議申し立てや対抗権力の可能性という観点から回避しようとする現代流行のアレント解釈に対する反論も、このような概念への注目の結果として可能になっており、興味深い論点が提出されているといえよう。

第二章では、アレントの政治哲学上の最大の関心が全体主義の起源にあったことを踏まえ、シチズンシップという今なお多くの論争の主題となっている概念が検討

される。ここでも、政治哲学的な論点は的確に整理されているが、やはりその特徴は、「伝えること」ということに着目することによってえられる哲学的、人間学的考察にある。とりわけ、しばしばなされるアレントの公私二元論や「社会的なるもの」の「政治的なるもの」からの排除ということに対する批判に対して、狭い意味での政治的な領域だけでなく「社交」や「地域ネットワーク」においても「伝えること」はなお可能であるという論点を提出することによって、アレント自身には（萌芽的にしか）なかった新しい可能性が示唆されており、これは今後のアレント思想の継承という意味でも重要な意義を有している考察であろう。

第三章では、「異なる視点に立つこと」という表題の元に、個と全体についてのアレントの思想が検討される。周知のようにアレントの政治哲学の到達点は、カントの『判断力批判』における美的判断力に関する理論を政治哲学的に読み替えるというものであった。この読み替えについても多くの批判が存在するが、本論の考察の特徴は、ガダマーやリクールといった同時代の解釈学的哲学を援用することで、アレントの理論のアクチュアリティを確保しようとするところにある。とくに、『人間の条件』で強調された「活動的生」の重要性が、晩年になって「注視者」の役割を強調する「観想的生」の重要性に取って代わられたとする批判に対する回答としての、注視者の視点は、同時に「新たに始める」という本論第一章でも強調された行為者の視点に他ならないという指摘は貴重なものである。

第四章は、アレントが終生思考の基準とした「自己との一致」に関する興味深い考察が展開される。通常「自己との一致」ということは良心に関わる道德の問題ではあっても政治の問題ではないとされ、アレント自身にもそのような記述がある。しかし、本論は、アレントの著作を小品まで含めて精査することにより、「自己との一致」というのはなほだ困難な課題は、まさしく自己を他者に伝えることのなかでのみ達成可能であるという解釈を提出し、アレントにおける倫理学と政治学の乖離という問題を、自己とは所与のものでも所有されるものでもなく、他者との交わりという行為のうちに現れるものであるという主張により解決しようとしている。これは政治哲学者としての評価のみが先行している近年のアレント研究に対して、そ

の倫理学的重要性を指摘したものとして高く評価しうる。

以上のように、本論は「伝えること」という一貫した観点からアレントのほとんどの著作を縦横に読み解いた成果であり、哲学・倫理学の領域におけるアレント研究として出色のものであることは疑いえない。二次文献に関しても、アレントに対して批判的なものを含めて網羅的に精査されており、それが本論の議論を力強いものとしていることも間違いない。しかし、いくつかの批判的論点、とりわけフェミニズムの側からの痛烈な批判や「熟議的民主主義」に対する現代的批判に関しては、紹介はなされてはいるものの、それに対する論者なりの積極的な回答がなされているとは言い難い面もある。ただそれは、論者の今後の課題とすべきことではあっても本論の学術的価値を直ちに損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2009年5月28日、調査委員長3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。